

医薬品の適正使用について ～医療従事者が医薬品の適正使用の 重要性を認識するためのシンポジウム～

12月3日 (木) 13:30～15:30 第8会場

座長：佐藤 玲子 (医薬品医療機器総合機構)
神村 英利 (福岡大学病院薬剤部)

- ◇医薬品の適正使用のための安全性情報の活用
佐藤 玲子 (医薬品医療機器総合機構)
- ◇患者さん・医療機関への質の高い情報提供をめざして
大箸 義章 (中外製薬)
- ◇医療現場における医薬品適正使用情報の効率的利活用
林 昌洋 (虎の門病院薬剤部)
- ◇院内外への情報発信と多職種連携による適正使用の実現
舟越 亮寛 (鉄蕉会医療管理本部薬剤管理部)
- ◇医師が、処方する薬を決定するために必要な適正使用情報とは？
中島 創 (松永循環器病院)

医薬品のベネフィットを最大限に引き出し、リスクを最小限に抑えるために重要な医薬品の適正使用について、行政、製薬企業、医師、薬剤師の立場から具体的な取り組みや意見を述べ、総合討論を行う。

佐藤玲子氏 (医薬品医療機器総合機構) はPMDAが実施する安全対策や、提供する安全性情報について紹介する。PMDAがウェブサイトで提供している安全性情報や添付文書をもとに、使用する医薬品にどのような副作用が起こり得るかを把握した上で、副作用の兆候を捉えるために必要な検査や患者の観察を行い、もし副作用が認められた時には投与の中止や適正な対処を行うよう、医療従事者に呼びかける。

大箸義章氏 (中外製薬) は、業界に先駆けて安全性情報の伝達を専門に扱うセイフティエキスパートを各エリアに配置し、医療機関を直接訪問して安全性確保の推進活動を実施していることや、治験時の副作用情報を様々な切り口で検索できるシス

テムを構築し医療従事者の求めに応じて提供していることを紹介する。

また、医療関係者に対してリアルタイムな安全性情報の提供を可能にするために、医薬品の副作用情報が検索可能な副作用データベースツールを今年5月に同社ウェブサイトを設置したことも提示する。

林昌洋氏 (虎の門病院薬剤部) は、添付文書やインタビューフォーム、医薬品リスク管理計画 (RMP) などを医療現場で効率的に利活用する方法を紹介する。

舟越亮寛氏 (鉄蕉会医療管理本部薬剤管理部) は、医薬品適正使用の対象が医療機関内にとどまらず地域全体へと広がっていることを示し、薬局との連携だけでなく診療所、介護施設を対象とした医薬品適正使用推進の取り組みを報告する。

中島創氏 (松永循環器病院) は医師の立場から、処方する薬を決定するために必要な適正使用情報や、臨床現場での薬の取捨選択について考察する。

かかりつけ医とかかりつけ薬剤師の 連携による薬物治療の実践

12月4日 (金) 15:30～17:30 第5会場

座長：原口 亨 (福岡県薬剤師会)
有海 秀人 (山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部)

- ◇医師と薬剤師の連携による薬物療法の取り組み
森田 啓一郎 (下川薬局)
- ◇薬物動態を踏まえた薬剤適正指導—患者情報と論文エビデンスから、血液凝固時間を鑑みた服用薬剤調整支援料算定症例
有吉 俊二 (三喜薬局)
- ◇外来から在宅へと繋ぐ、さらに在宅緩和ケアチームの一員としてのかかりつけ薬剤師、かかりつけ薬局としての役割
江口 真理子 (大賀薬局野芥調剤店)
- ◇訪問診療前の薬剤師訪問による、患者中心の薬物治療の実践
高橋 俊輔 (サンキュードラッグ桃園薬局)
- ◇適切な薬物療法を目指して：Medical Care STATIONを利用した薬剤師および多職種との連携
新田 智之 (新田医院)

厚生労働省が公表した「患者のための薬局ビジョン」の中で、かかりつけ薬剤師の役割の一つとして「かかりつけ医をはじめとした医療機関等との連携強化」が示されるなど、地域包括ケアシステムを構築する上で薬局を含めた地域の様々な機関の連携は欠かせないものとなっている。医師と薬剤師がそれぞれの立場から、両者が連携する取り組みや工夫を紹介する。

森田啓一郎氏 (下川薬局) は、医師から「降圧剤を追加するなら何がいいか」「過活動膀胱の症状に対して服薬するなら何がいいか」「喘息コントロールが不良な患者に対して別の吸入薬はないか」などと相談を受けて処方を提案した事例を示し、医師と薬剤師のより良い連携のあり方を考察する。

有吉俊二氏 (三喜薬局) は、心臓大動脈弁の手術を終え、ワルファリン服用中にエゼチミブが追加服用となった高齢女性患者について、処方医と相談してイコサペントとメチコパールの減薬に踏み切った事例などを紹介する。

江口真理子氏 (大賀薬局野芥

調剤店) は、地域包括システムの一翼を担う存在として在宅医療に関わり、癌患者の終末期を含めた継続的な薬学的管理と患者支援を実施した症例や、コロナ禍において医療機関での面会制限を理由に退院した患者に無菌調製可能な薬局として終末期のみ訪問薬剤師として関わった事例を提示する。

高橋俊輔氏 (サンキュードラッグ桃園薬局) は、在宅患者に対して、薬剤師が医師の訪問診療の前に患者や施設職員と面談して患者の状態変化や残薬を把握し、効果や副作用を事前に評価することで適正な薬物治療に積極的に関わっていることを示す。

新田智之氏 (新田医院) は、パソコンやタブレット、スマートフォンなどで操作できる非公開型医療介護連携コミュニケーションツールを導入し、医療や介護従事者との連携を推進することで、多職種間の連絡業務の削減が可能になり、方針の統一が図れることでチーム意識が芽生え、医療や介護の質の向上、患者や家族の安心感向上につながったことを話す。

被験者ポータルサービスを通じて Patient Centricityの実現を支援

Patient Journey



認知する

理解する

参加する

終了する



治験依頼者

BELL SYSTEM 24

医師・看護師
CRC

株式会社ベルシステム24 医薬開発事業部

<お問合せ先>TEL: 03-6219-4666 (営業代表) HP: <https://www.bell24.co.jp/ja/>

>>> Patients always at heart.

新しい治療法を1日でも早く届けるために、
患者さんと共に、開発企業と共に、
未来を創る。パートナーで在り続ける。

With Heart

まごころをこめて

parexel.

www.parexel.com
JapanMarketing@parexel.com
パレクセル・インターナショナル株式会社

約100名の元規制当局職員を含む1,000名規模の薬事&マーケットアクセスのコンサルタント、そして日本を含むグローバル各国での臨床開発の経験に基づく専門性とeClinicalテクノロジーがパレクセルの強みです。